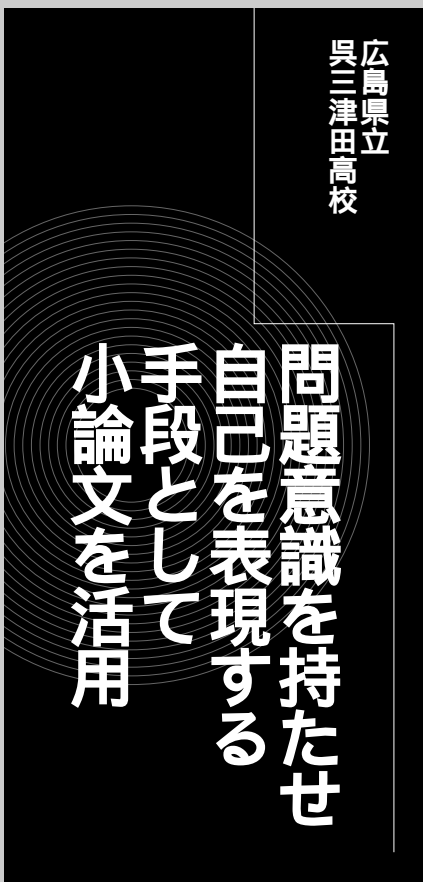


これまで広島県立呉三津田高校の小論文指導は、大学入試で対策を必要とする生徒が希望した場合に行っていた。だが、希望者は年々増え、一部の教師に負担が集中し始めた。国語科の小路口真理美先生はこう語る。

「生徒は、小論文を少しでもうまく書くこと、国語の教師に書き方の指導を求めてきました。でも、上手な文章が書いても、それが必ずしもよい小論文とは限りません。最近の入試の小論文は書く技術だけでなく、どれだけ幅広い知識を持ち、自分なりの問題意識を持っているかを問います。ですから、さまざまな分野に生徒の目を向けさせ、自分の頭で考える力を育成する指導が早い段階から必要です。10年度に1年生を担当することに決まったとき、この新入生たちには1年次から小論文に取り組ませよ」と思いました。

広島県立  
呉三津田高校



それを文章で表現する力が求められています。小論文で必要な情報収集・処理能力、自己表現力は入試だけではなく、生徒が社会で生きていく中でも必要とされると田中先生は語る。そんな力を生徒に身につけさせるためには、時間を

つてきた。これに加えて、豊かな発想と論理的思考力を持ち、自分の意見をはっきりと他者に伝えられるよう指導に力を入れることになった。新しい小論文指導の中心を担ったのは国語と地歴・公民の教師。教材には「キャリアサポーター」の「小論文アプローチ」が用いられた。「小論文アプローチ」は、思考法や発想法を身につけながら基本的な文章表現を学べるトレーニングノート、新聞の読み方の解説などを通して情報収集力を高め、社会の諸問題についての関心を喚起するワークノートが中心となる。同校では、国語でトレーニングノート、公民でワークノートと分担した。

多くの自己表現の機会を

「1学期に現代社会の授業で環境問題が取り上げられたんです。ちょうどワークノートには環境問題もテーマの一つとして取り扱われていたので、授業のあと、そのページを使って生徒に環境問題について考えを發表させたり、生徒同士で討論させたりしたそうです。ワークノートには新聞のスクラップなどの情報のファイリング方法も紹介されていますから、授業で学んだことを自学自習しながらさ

かけた低学年次からの指導が必要だったのだ。

「多」とも同校では、生徒に自分の考えを文章で表現させる指導を積極的に進めていた。「入学式の日には自己紹介や高校に入学しての抱負などを書かせ、保護者には高校生になった子どもにメッセージを書いていただきます」(進

路指導部長・三好義城先生) 同校では高校生活の中で生徒の自己表現の場を随所に作ってきた。これに加えて、豊かな発想と論理的思考力を持ち、自分の意見をはっきりと他者に伝えられるよう指導に力を入れることになった。新しい小論文指導の中心を担ったのは国語と地歴・公民の教師。教材には「キャリアサポーター」の「小論文アプローチ」が用いられた。「小論文アプローチ」は、思考法や発想法を身につけながら基本的な文章表現を学べるトレーニングノート、新聞の読み方の解説などを通して情報収集力を高め、社会の諸問題についての関心を喚起するワークノートが中心となる。同校では、国語でトレーニングノート、公民でワークノートと分担した。

らに深める道筋が見えたはずですよ」(田中先生) ワークノートには環境問題のほか、科学技術、日本文化、情報化、国際化がテーマとして取り上げられている。夏休みには、その中から一つを選んで、ワークノートを参考に小論文を書かせた。また国語では、トレーニングノートを使って文章の書き方の練習に取り組ませた。

生徒主体の討論会

同校では、夏休みに1年生を対象にした民間の宿泊施設での2泊3日の「ふれあい体験学習」を実施する。この中で、小論文に必要な「自分の意見を述べる力」を養うために「ディスカッションを行った」。

「ディスカッションに向けて、地歴・公民、理科、国語の教師が協力して討議資料を作りました。インターネットやクローンなどワークノートの五つのテーマに合わせた題材のほか、教育問題、死刑制度の二つを加えて、進路指導部からそれぞれの分野に詳しい先生方に協力を依頼し、資料を作成していただきました。新聞の切り抜きを使ったり、自分で要点をまとめたり、本の一部を転載したりと、各先生方がそれぞれに工夫して資料を作成してくれました。そして、どの資料にも必ず議論のきっかけとなるような設問を設け、生徒

が討論しやすいようにしました」(小路口先生) 「また、各クラスを複数の班に分け、生徒が周囲を気にせずに討論に集中できるように1部屋1、2班ずつとしました。教師が各部屋を巡回し、議論が行き詰まっている班があればアドバイスしました。討議の時間は1時間で、各班でなんらかの結論をまとめます。そして、クラスごとに集まって討議の内容を發表しました」(田中先生)

高まる生徒の主体性

前日には班長を集めて、1時間が実りのあるものになるかどうかは、班長の進め方が重要なと八ツバをかけ、当日は討論の意義を各担当の先生に話してもらいました」(小路口先生) ディスカッション本番では、事前に選んだテーマではなかなか議論が進まず、途中でテーマを変えた班もあったが、1時間後にはすべての班が議論を終え、その内容を發表した。これらの新しい自己表現の取り組みを通して、生徒側にもどのような変化が見られたのだろうか。



三好義城  
地歴担当  
進路指導部長を務めて10年度から5年目。「最近の生徒は論議をしやすいので、呉三津田高校を論議の盛んな学校にしてほしい」



小路口真理美  
国語担当。10年度は1年生を担当し、初めて進路指導部に所属。授業で「自分なりの考えをテーマに議論させる。など小論文以外でも新しい試みをしてほしい」



田中清裕  
生物担当  
10年度は同校初めて1年生の担任を務め、同時に1学年の進路係を担当した。「最近の生徒は考え方が少し子どもっぽい。進路指導を通して将来を考えさせてほしい」

広島県立呉三津田高校

「私だったら……。」と生徒が問題を自分に引き寄せて考えるようになりました。こちらがLHRや授業の中でなにか疑問を投げかけて生徒に任せるだけで、自然に議論が始まります」(田中先生)

「入学当初、正解を書かなくてはいという気持ち強いのか、なんでも思ったことを書くのが苦手な傾向があった生徒たちが、今はテーマを与えれば自由に書き、なぜそう考えるのかを聞けば、一生懸命に自分なりに考えて答えるようになりました。今後は読書などを通して、さらに知識を蓄積し視野を広げさせたいですね」(小路口先生)

三好先生は、4月より教頭として広島国泰寺高校(定時制)に異動されています。